平塚らいてうの会ニュース

発　行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

今年は『青鞜』創刊百周年
「わたし」を生きた女たちのメッセージを

NPO平塚らいてうの会会長　米田佐代子

今年は『青鞜』創刊100周年、らいてう生誕125年です。最近若い方から、そんなに遠い昔のことをなぜ取り上げるのかと聞かれました。

『青鞜』も「らいてう」も、もう古くなったのでしょうか。1911年9月から1916年2月まで、「冬の時代」から「大正デモクラシー」の時代を風のように駆け抜けた女性たち―平塚らいてうを含めてその大半は20代の若さでした。「新しい女」と非難され、スキャンダルにさらされながら、彼女たちはなによりも一人の人間として「わたしはわたし」として生きる道を求めて悩み、葛藤し、論争しました。雑誌『青鞜』には、いまもわたしたちがぶつかっている「ジェンダー」や「エンパワーメント」をはじめ、「家制度」や「経済的自立」、「恋愛」「子育て」、「リプロダクティブ　ヘルス／ライツ」「セクシュアル　ハラスメント」「同性愛」「事実婚」「売買春」「平和」などのテーマが、宝石箱をぶちまけたようにあふれ出ています。らいてうもそうであったように、戦後も女性の政治参加や平和運動に力を注いだメンバーもいます。『青鞜』は古いどころか「今こそ新しい」のです。

『青鞜』100年をふりかえり、「わたし」を生きた女たちのメッセージに耳を傾けたいと思います。記念企画にぜひご参加ください。

なお、『青鞜』発祥の地・文京区でも記念行事を、という声があり企画検討中です。

青踏の社員の人たち。後列左から2人目らいてう（大正元年）

▼文化行事・『青鞜』創刊百周年記念
森の祝祭―Nらいてうの家
「百年の女たちのメッセージを聴く」

日時　2011年9月4日
場所　らいてうの家・らいてうの庭（長野県上田市真田町）上田駅より送迎バスあり。
内容　各界の方々によるリレートーク、野外コンサート、「夏の会」有志による朗読劇「夏の雲は忘れない」（抜粋）など。

出版　『平塚らいてうの会紀要』4号

創刊百周年記念特集号（6月発行予定）
論文―（青木生子、クリスティン・レヴィ、高良留美子、富田裕子、堀場清子、米田佐代子）
各界からのエッセイ（『青鞜』百年に想う）
初公開の資料紹介（解説・折井美耶子）など。

協力企画　国際シンポジウム

今、世界が読む『青鞜』

日時　2011年9月10日（土）1時～5時
（午前中『青鞜』ゆかりの女子大見学あり）
会場　日本女子大学　百年館
主催　日本女子大学「新しい女」研究会
『青鞜』創刊100周年国際シンポジウム実行委員会
協力　NPO平塚らいてうの会・平塚らいてう研究会・らいてう研究会
報告者　ヴェラ・マッキー（オーストラリア）
ジャン・バーズレイ（アメリカ）
申南珠（韓国）
溝部優実子（日本）
コメンテーター
クリスティン・レヴィ（フランス）
未定（日本）交渉中

京都から大型バスで！

「行きたい、行きたい」とラブコールしてくださった京都自治労連女性部のみなさんが、大型バスできてくださいました。閉館間際の11月7日です。好天に恵まれ、ごらんのとおり屋外で記念写真をパチリ。当日は、地産地消・手づくりのコラボ食堂（上田市）がお弁当を届けてくれたのですが、注文数が毎日増えてついに40個！江戸時代のレシピを現代風にアレンジした「あや姫ご膳」が好評でした。現役でがんばっておられる元気いっぱいのみなさんに、わたしたちも励まされました。またきてね！

フィナーレはおおにぎわい

今年の「家」は、11月8日から冬季休館の予定でしたが、バスの都合がつかなかったというお申し出に、閉館を半日延ばして9日にお迎えしたのは武蔵野市ヒューマンネットワークのみなさん。奥村直史さんご夫妻も同行、毎日新聞記者の明珍美紀さん（元新聞労連委員長）も取材を兼ねて参加、「建築士に会いたい」というご希望に「獏」の小福田さん、小林さん、佐藤さんも駆けつけ、ウワサを聞いて新任の信濃毎日新聞上田支社長・藤島義昭さんも来訪されるにぎやかさ。閉幕を飾る楽しい交流でした。

〈上〉京都自治労連女性部のみなさん。
〈中〉武蔵野市ヒューマンネットワークのみなさん。
左から明珍美紀さん、奥村直史さん、米田館長、1人おいて奥村洋さん。
〈下〉山宣碑前祭

「七人委員会」に辻井喬さん―記念講演会

世界平和アピール七人委員会に、らいてうの会講演会にもきてくださった辻井喬さんが新しく参加され、11月12日東京で55周年記念講演会がありました。「武力によらない平和を」というテーマで七人の委員全員が発言、これこそ初代委員だったらいてうの思いと同じ、と感動しました。池田香代子さんや小沼通二さんはじめ委員のみなさんに『「らいてう」ニューヨークへ行く！』をさしあげ、大石芳野さんも「いつからいてうの家に行きたい」といってくださいました。（米田佐代子）

「山宣とらいてう」の接点とは？

米田館長が碑前祭で講演

10月10日別所温泉での山宣碑前祭と講演の会で、米田館長が「山宣とらいてうは、立場はちがっていたが大正デモクラシーの時代に生き、いのちを守る平和をという点で一致していた」と語り、「例年になく女性が多かった」という参加者の共感を呼びました。なお、山宣会の会長は上田駅前の書店平林堂の平林茂衛さんで、このほど創業60周年を祝いました。らいてうや青鞜関連の本もおいてくださっています。

映画―「嗚呼　満蒙開拓団」

お話：羽田監督「お国のため」と送り込まれ：

11月6日、平塚らいてうの記録映画を上映する会主催の、映画「嗚呼　満蒙開拓団」が、日本女子大学成瀬記念講堂で上映されました。

上映に先立ち、羽田澄子監督による『嗚呼満蒙開拓団』にたどりつくまで」と題するお話がありました。羽田監督は大連生まれ、小学校も女学校も旅順。しかし満州の奥地で起こった悲劇についてはよく知らなかったそうです。「中国残留孤児」の国家賠償請求訴訟がはじまりこれを見守っているなかで、「方正地区日本人公墓」のこと、敗戦後方正地区だけで数千人の避難民が亡くなったことを知り、日本の近現代史を振り返ることの大切さを考えて映画化したと語りました。↖

↙　映画は、残留孤児の東京地裁判決の場から始まり、方正のお墓にお参りするツアーに参加した監督が、元開拓団の人々や宿泊先のホテルに会いに来てくれた中国の養父母たちの聞き取りを丹念にする様子が映し出されます。当事者の生の姿や声は、文字よりもいっそう私たちの心を強くゆさぶります。羽田監督が、平和への祈りを込めて作り上げた作品でした。（折井美耶子）

らいてう講座

「昔語り…菅平に生きて」

上田の女性の中でも高冷地に生きて戦後の困難な時期から高度成長期を逞しく生活してきた菅平の方の話をぜひ聞いておきたいと、昨年10月17日の集いとなりました。

大正15年生まれの村田さくよさんは84才。戦地から引き揚げてきた開拓農家に昭和23年に嫁ぐ。本当に厳しい生活で、食べ物も少なく乳の出が悪く山羊の乳を飲ますように乳児検診で言われたとのこと、その頃から乳児検診があったことを知りました。（昭和17年の戦時下に「妊産婦手帳」が発行され、昭和23年に「母子手帳」に変わった＝「婦人通信」12月号）。昭和60年の開拓記念碑「拓魂」に夫婦二人の名をと話されたとき、「ほー」と一同共感が広がりました。

大正10年生まれの西村つやさんは89才。名古屋が空襲となり親戚の菅平に一人疎開してきました。戦後、農業技術者養成の「農民教育協会」で3年働き、陸士や予科練中退の人がいたとの話に及ぶと米田館長は大関心。GHQの話しにまでなり歴史の知られざるひとこまを知る機会となりました。

79才となる加藤春子さんは雪の日の祝言で初めて夫となる人の顔を見たとの話には「誰かが見染めたんだ」と合いの手。菅平農業試験場に勤めていた時の義兄さんなどのススメだったそうです。

冬は氷点下20度にもなる菅平で、子育てと農家と民宿をやってきた三人の語り手に、参加者みんなで感謝しました。

（真田らいてうの会・木村見江）

「らいてうの家」冬季閉館で大掃除

11月9・10日、木造りの「家」に「ご苦労様」と、みんなで大掃除しました。晴れたり曇ったり、霙が降ったりと忙しいお天気、寒い日でしたが、今年は大阪から山田さんご夫妻が参加され、地元からも大勢の会員さんがきてくださり、予想外のテンポですすみました。今まで手が届かなかった高い窓の手入れもできて「家」が一層美しくよみがえりました。大掃除の傍らご飯を炊き、持ち寄りのご馳走でお腹いっぱいになった後は反省会。8月の「あずまや高原夏まつり」は忙しかったけれど、みんなに喜ばれてよかった。案山子百体はインパクトがあった、などなど。最後は来年もがんばろう！。みなさまお疲れ様、ありがとうございました。（井上美穂子）

大掃除のお手伝いをして

8月の朝、開館を待っていたときの木々の色や空気、建設までの苦難の乗り越え方の話、これらは家の内の心地よさとともに私たちをゆさぶり、この家を守りたいと思いました。らいてうの家の運営に地元の会員の方々の並々ならぬご努力も知り、私たちにできることはないかと考えていました。閉館のお掃除のお知らせに、これなら手伝えると押しかけた次第です。デッキ掃除をしました。風も強く粉雪も舞いましたが、体も心も暖かく2人とも気持ちよくやれました。下にもぐってのペンキ塗りもやり終えたら気持ちいいものでした。

反省会の様子とともに協同に貫かれた姿勢を目の当たりにしました。気持ちよく普通のことができるのが平和なのだとも感じました。

帰宅して夫は早速、来年のためのメモを書いていました。来年は当番の見習いをさせてもらいたいと2人で話しています。（大阪堺・山田裕美）

らいてう講座のお知らせ

石橋湛山の女性論―『青鞜』百年に寄せて

講　師　浅川　保さん（山梨平和ミュージアム・石橋湛山記念館理事長）
会　場　東京文化会館4階大会議室
日　時　2月26日（土）13：30～

40年の歳月を超えて
～悟堂さんとらいてうさん

2010年10月13日、紅葉のらいてうの家に、中西悟堂研究会のみなさんが来館され、その折に中西悟堂さんの長女の小谷ハルノさんから寄贈されたのがこの素晴らしい笑顔の写真です。裏書によると昭和42年（1967年）4月27日（らいてう氏宅にて）とあり、このとき、らいてうさんは81歳、悟堂さんは9歳年下の72歳になります。

らいてうさんが悟堂さんに始めて会ったのは、昭和3年（1928年）のことです。関東大震災後の社会矛盾の激化する中、よりよき未来につながる生活を求めて武蔵野で木食生活をしていた悟堂さんの随想集「藁家と花」を読んだらいてうさんが、家族とともに悟堂さんを訪ねたのでした。『青鞜』の後、新婦人協会の激しい活動で健康を損ねたらいてうさんが地方に転地して、自然の中で子育てをしながら回復して東京に戻った時のことです。二人とも、自然に回帰する中で、新たな歩みを模索していた時で深い印象を分かち合ったのでしょう。このとき以来、母の行方を知らない悟堂さんにとって、らいてうさんは姉のような存在になったということです。この後、らいてうさんは、協同、自治の社会を構想して消費組合「我等の家」を始め、悟堂さんは、これから6年後「日本野鳥の会」を設立します。

そしてこのとき悟堂さんが多摩川の土手から掘りあげてらいてうさんに贈ったギボシの花を疎開先にも持ち続けたらいてうさんが、戦後になって40年の時を隔てて悟堂さんに株分けして贈り、悟堂さんは、驚きながら、如何にもらいてうさんらしいと思われたのでした。この写真は、そうしたギボシの花信のやりとりなどの親しい交流の日々の中のある一日に撮られ、らいてうさんの晩年を彩る記録となったのでした。

戦後のらいてうさんは、戦争への痛切な反省から、平和と女性と子どもの幸せのための運動に晩年まで携わり、悟堂さんは、日本野鳥の会の会長として「自然保護法」の制定など自然保護の運動の先頭に立って活動し、引退ということはありませんでした。戦後民主主義の下で実現した文化の土台は、前の時代を生きた人々の真しな探求により準備されたこと、こうした歴史をもっと知りたい思いにかられます。

絶望することなく、未来に希望を託して真摯に生き抜いた二人の笑顔は、私たちに温かく大きな励ましを贈ってくれています。

（三留弥生）

【事務局日誌】

10月1日　「櫛田ふきさん没後10年のつどい」打ち合わせ会に出席

10月2日　「らいてう講座」NPTニューヨーク行動報告会（於東京ウイメンズプラザ）

10月11日　「会」と「家」の今後を考える現地プロジェクト会議（於真田）

10月13日　中西悟堂研究会関係者「家」来館

10月14日　「あずまや高原夏祭り」の総括会議（於真田林業会館）

10月15日　第4回理事会開催

10月28日　紀要第4号編集会議

11月6日　記録映画を上映する会主催映画会羽田澄子監督のお話と「嗚呼満蒙開拓団」上映（於日本女子大成瀬記念講堂）

11月9日　「らいてうの家」閉館・大掃除

11月10日　大掃除、午後反省会

11月14日　展示品収納作業を行う

11月29日　『青鞜』百年国際シンポについて日本女子大で実行委員会打ち合わせ

12月1日　紀要第4号編集会議

12月3日　『青鞜』百年イベント現地実行委員会（於真田図書館）

12月10日　「櫛田ふきさんつどい」打ち合わせ

12月12～14日　小林登美枝さん資料整理（真田）

12月12日　ジェンダー史学会大会に書籍普及参加

12月16日　第3回常任理事会